W-3-1

南琉球の三型体系発見の持つ理論的意義 —特に韻律階層に焦点を当てて—

松森晶子（日本女子大学）

１． はじめに

従来の日本語の韻律研究では，ある体系のプロミネンス位置の算出に関わる単位が「モーラ (μ) か，音節 (σ) か」というパラメータが提唱されてきた。これに対し宮古諸島の韻律体系では，それらより大きい韻律範疇である「フット (f)」や「韻律語 (ω)」がその韻律型の決定に積極的に関与する。このような特徴は南琉球の韻律体系に広く共有されていることが，最近の記述研究によって明らかになりつつある。本発表では，多良間方言を中心に，過去 10 年ほどの南琉球のプロソディー研究史を簡単に概説した後，宮古島の上地方言と与那覇方言，伊良部島の佐良浜方言，八重山諸島の黒島方言の三型体系を取り挙げ，それらの体系間の韻律型の異同や，体系内の型の中和の原因について考察する。特に韻律階層 (The Prosodic Hierarchy)」に言及しながら，上述の三型体系の韻律型の実現において ①フットがどのように関わっているか，②韻律語には階層的な構造が想定できるか，という視点からの検討を行う。

２．琉球語のプロソディー研究：南琉球での新展開

現在，琉球語のプロソディー研究が活況を呈している。この約 10 年あまりの間に，南琉球（宮古・八重山諸島）において 3 種類の韻律型の区別が見られる「三型体系」が新たに次々と発見されており，またそれらの体系の仕組みが解明されていくにつれて，プロソディーの類型的考察の観点から見ても重要な諸事実が，明らかになってきている。

まず**宮古諸島**については，松森 2010，2014，2022b，印刷中，Matsumori 2019，五十嵐 2015，2016a，青井 2016，2017，2018，2019，2022，セリック 2020a，2021b,c，セリック ・青井 2021a,b，2022，新田 2023a の**多良間島方言**，松森 2013，2022a，新田 2023b の**宮古島**の**与那覇方言**，五十嵐ほか 2012，五十嵐 2016a，b，（本 WS の発表），Igarashi et al. 2018，新田 2022 の**池間方言**，松森 2015 の**狩俣方言**，Matsumori 2019 の**上地方言**，セリック 2021a の**皆愛方言**，セリック 2020b の**水納島方言**，松森（本 WS の発表）の**伊良部島**の**佐良浜方言**などの記述が成されている。一方，**八重山諸島**については，中川・セリック 2020 の**石垣島**の**白保方言**，セリック・麻生・中澤 2022，セリック・麻生（本 WS の発表）の**宮良方言**，セリック ・麻生（本 WS の発表）の**大浜方言**と**四箇方言**，松森 2015，セリック・麻生 2023，セリック・麻生・中澤 2023 の**小浜島方言**，松森 2015，セリック・麻生（本 WS の発表）の**西表島**の**古見方言**，松森 2015，2016 の**黒島方言**，松森 2015，麻生・小川 2016 の**波照間島方言**などの記述が進んだ。（なお紙幅の制約のため，発表に関しては過去 3 年間のものだけを紹介している。）

このように比較的短期間に数多くの記述研究が成される契機となったのは，韻律単位についての我々の「発想の転換」である。一般にプロソディーには，次の（1）に示したような韻律階層がこれまで想定されてきたが，「モーラ，音節，フット」の上位に位置する「韻律語 Prosodic Word（ω）」という韻律範疇については，従来の日本語アクセント研究において光が当てられることは少なかった（おそらくこの韻律範疇を想定せずとも，十分な記述ができていたからであろう）。

（1）The Prosodic Hierarchy 韻律階層

Intonational Phrase（ ι ）イントネーション句 ＞ Phonological Phrase（φ）韻律句 ＞
Prosodic Word（ω）韻律語 ＞ Foot（ f ）フット ＞ Syllable（σ）音節 ＞ Mora（μ）モーラ

ところが南琉球の諸方言では，この韻律範疇の想定こそが，その韻律体系の仕組み解明のための重要な鍵を握っている。「韻律語」という単位を想定することによって始めてその全貌が見えてくるような韻

律体系が，近年，続々と発見されてきたのである（一例としてセリック・麻生(本 WP の発表)参照)。

その典型例が，(2) に示した宮古諸島の多良間島の方言（以下「多良間方言」）の体系である。本稿では ‘[’ はピッチ上昇の位置，‘]’ はピッチ下降の位置，＝は助詞境界，＋は複合語の語根間の境界，… は他の文節が後続することを意味する。また高ピッチのモーラをボールド体で，単独でモーラを形成する子音を大文字（L，N，M など）で示す。なお母音の連続体は長母音を示す（例 : aa＝[aː]）記号である。

(2) 多良間方言の三型体系　　単純語に 2 モーラの助詞を一つ付けた場合（mai : 累加）

[A 型]　**[piL　=mai** … 大蒜(にんにく)も…　**[kuba =mai** …　クバも…　**[jaroo =mai** …　テリハボクも…
[B 型]　**[ɕuu　=ma**]i … 野菜も…　**[mami =ma**]i …　豆も…　**[uddʑa =ma**]i …　鶉も…
[C 型]　**[wa**]a　=mai … 豚も…　**[baɕo**]o =mai …　芭蕉も…　**[funu**]u =mai …　蜜柑も…

多良間方言の体系では，A 型には核がなく，B 型には助詞の最後に低ピッチ（以下 L 音調と呼ぶ）が出現し，C 型には名詞の内部に L 音調が出現するかのように見える。(なお共通日本語と違ってこの方言の核の位置は，ピッチの下がり目の直前のモーラではなく，韻律語末尾に出現する L 音調の箇所にある（詳細は新田(本 WS の発表)参照)。）しかし複合語になるとその核は, B 型では（助詞ではなく）複合語の後部要素内部に，C 型ではその前部要素の内部に出現する。これは次の（3）が示している。

(3) 多良間方言の三型体系　　複合語に 2 モーラの助詞を一つ付けた場合

[A 型]　**[kuba + gii　=mai** …　クバ木も…　**[jaroo + gii　=mai** …　テリハボク木も…
[B 型]　**[mami + gi]**i　=mai … 豆木も…　**[naddʑa+ gi]**i　=mai …　桑木も…
[C 型]　**[baɕo]**o + gii　=mai … 芭蕉木も…　**[funu**]u + gii　=mai …　蜜柑木も…

すなわち「名詞，2 モーラ以上の助詞，複合語の各語根」等が，それぞれ独立した韻律単位を形成すると考えなければならない。このような形態的な情報に基づいて形成される韻律上の単位のことを「韻律語 prosodic word」と呼ぶ（その定義の詳細については，五十嵐(本 WS の発表)参照)。

そうすると多良間方言の三型体系は，① A 型は（基本的に）L 音調（核）がどこにも出現しない無核型，②B 型は文節の 2 番目の韻律語の末尾モーラに L 音調（核）が現れる型，③C 型は 1 番目の韻律語の末尾モーラに L 音調（核）が現れる型，と記述しなければならないことになる。つまりこの体系においてプロミネンス位置の算出に用いられる単位は，(モーラに加え) 韻律語であるということになる。これを次のように記述する。以下 ω は韻律語を，＊ はその韻律語に置かれる核を示す。

(4) 多良間島の韻律体系の解釈

[A 型]　**(jaroo)**$_{\omega}$　+　(**gii**)$_{\omega}$　= (**mai**) **ω** …　テリハボク木も…
[B 型]　**(naddʑa)**$_{\omega}$　+　(**gi]**i)$_{\omega}^{*}$　= (mai) **ω** …　桑木も…
[C 型]　**(funu]**u)$_{\omega}^{*}$　+　(gii)$_{\omega}$　= (mai) **ω**…　蜜柑木も…

３．宮古諸島の韻律体系

現在までに多くの宮古諸島の韻律体系が，その複合語の韻律型まで考慮すると，3 種類の型の対立を持つ「三型体系」であることが明らかになっている。しかしその表面のピッチ実現の仕方は，方言によって大きく異なる。すなわち宮古諸島の三型体系には，多様な変種が存在することも分かってきている。

3．1．宮古諸島の三型体系の多様性と共通性

多良間島の「①A 型は無核，②B 型は 2 つ目の韻律語，③C 型は一つ目の韻律語に核が出現する」という特徴は他の宮古諸島の体系にも見られるが，次の狩俣方言では，A 型にもその 3 つめの韻律語部分

にプロミネンスが出現する。そしてその位置は，各韻律語の後ろから数えて 2 つ目のモーラ直後に出現するピッチ下降によって判別できる。つまりこの体系では，①A 型は 3 つ目，②B 型は 2 つ目，③C 型は一つ目の韻律語に核が出現する（と発表者は解釈している）。

（5）宮古島狩俣方言の三型体系　（kara：奪格，du：焦点）

[A 型]　**[kuusu**　+　**bari**　=**kara**] =du…　唐辛子畑から…
[B 型]　**[mugɨ**　+　**ba**] ri　=kara=du…　麦畑から…
[C 型]　**[tama**] na　+　pari　=kara=du…　キャベツ畑から…

狩俣方言と同様，次の上地方言でも①A 型は 3 つ目，②B 型は 2 つ目，③C 型は一つ目の韻律語にプロミネンスが実現する。しかし狩俣方言とはその出現位置が若干異なっており，そのピッチ下降は，各韻律語の後ろから数えて 3 つ目のモーラ直後に実現する。

（6）宮古島上地方言の三型体系　（kara：奪格，du：焦点）

[A 型]　**[kuusu** + **pari** = **ka]**ra= **[du**…　唐辛子畑から…　**[mɨɨna** + **bari** = **ka]**ra= **[du**…　韮畑から…
[B 型]　**[sɨMna]**+ pari = kara= **[du**…　葱畑から…　**[mami]**+ bari = kara= **[du**…　豆畑から…
[C 型]　**[ba]s**oo + bari = kara= **[du**…　芭蕉畑から…　**[u]**kiN + bari = kara= **[du**…　ウコン畑から…

次の与那覇方言では，各韻律語内部に 3 モーラの H 音調から成る固まりが形成され，その固まり全体が高ピッチ（以下 H 音調と呼ぶ）で実現している。

（7）宮古島与那覇方言の三型体系　(kara：奪格，du：焦点，juzza：比格)

[A 型]　saki + gami = [**kara**=**du**]…　酒甕から…　saki + gami = [**juzza** …　酒甕より…
[B 型]　M [**tsu** +**gami**] = kara=du …　味噌甕から…　M [**tsu** + **gami**] = juzza …　味噌甕より…
[C 型]　**[maasu**] + gami = kara=du …　塩甕から…　**[maasu**] + gami = juzza …　塩甕より…

（6）と（7）の上地・与那覇方言には，①3 モーラが 1 単位となるフットを想定し，②そのフットの右端を韻律語の右端と揃えるという仕組みを想定することとする。次のようなものである。

（8）フットの右端を韻律語の右端と揃えよ（上地・与那覇方言の韻律体系に適用）

（ …… μ μ μ ）ω
＜ μ μ μ＞ f

一方，次の伊良部島の佐良浜方言には，そのフットサイズが，上地・与那覇方言とは異なる体系が観察されている。

（9）伊良部島佐良浜方言の三型体系　（mai：累加，kara：奪格，du：焦点）

[A 型]　ju**[na]** guni＋bitu = [**mai**=**du** …　与那国人も…　ju**[na]** guni＋Nsu = [**kara**=**du** …　与那国味噌から…
[B 型]　u**[tsɨ]** naa ＋bitu = [**mai**=**du**…　沖縄人も…　u**[tsɨ]** naa ＋Nsu = [**kara**=**du** …　沖縄味噌から…
[C 型]　sa**[ra]** hama＋[**bitu**] =mai=du…　佐良浜人も…　sa**[ra]** hama＋[**Nsu**] = kara=du …　佐良浜味噌か…

[A 型]　ju**[na]** guni＋bikiduN= **[mai** …　与那国男も…　ju**[na]** guni＋bitu =**[kara]** =mai=du…与那国人からも…
[B 型]　u**[tsɨ]** naa ＋bikiduN= **[mai**…　沖縄男も…　u**[tsɨ]** naa＋bitu= **[kara]** =mai=du…　沖縄人からも…
[C 型]　sa**[ra]** hama＋**[biki]** duN=mai…　佐良浜男も…　sa**[ra]** hama＋**[bitu]** =kara =mai=du…佐良浜人からも…

[A] ju**[na]** guni＋Nsu= **[kara]** =mai=du…与那国味噌からも　ju**[na]** guni＋bikiduN=**[kara]** = mai=du…与那国男からも
[B] u**[tsɨ]** naa ＋Nsu= **[kara]** =mai=du…　沖縄味噌からも　u**[tsɨ]** naa＋bikiduN= **[kara]** = mai=du…　沖縄男からも
[C] sa**[ra]**hama＋**[Nsu]** =kara =mai=du …佐良浜味噌からも　sa**[ra]** hama＋**[biki]**duN =kara =mai=du…佐良浜男からも

（10） 伊良部島佐良浜方言の韻律型

[A 型] ju**[na]** guni = kara=du … 与那国から… ju**[na]** guni =kara =mai=[**du** … 与那国からも…

[B 型] u**[tsɨ]** naa = [**kara**=**du**] … 沖縄から… u**[tsɨ]** naa = [**kara**] =mai=du … 沖縄からも…

[C 型] sa**[ra]** hama = [**kara**=**du**] … 佐良浜から… sa**[ra]** hama= [**kara**] =mai=du … 佐良浜からも…

（9）の例はすべて AB 対 C のような中和を遂げているのに対して，（10）の例は A 対 BC のような中和を遂げている。したがって両者を比較すると，この方言も三型体系と認定できる。この体系には 2 モーラから成るフットを想定し，池間方言に関する新田 2022 の解釈を採用し「核の置かれた韻律語の右隣を 1 フット分，高くする」とする。そのフットは，核の置かれた韻律語の右隣の韻律語の左端に揃える。

（11）佐良浜方言の韻律体系の解釈

[A 型] (ju**[na]** guni)**ω** ＋ (bikiduN)**ω** = ([**kara**])**ω** * = (mai =du)**ω** … 与那国男からも…

[B 型] (u**[tsɨ]** naa)**ω** ＋ (bikiduN)**ω*** = ([**kara**])**ω** = (mai =du)**ω** … 沖縄人男からも…

[C 型] (sa**[ra]** hama)**ω** * ＋(**[biki]**duN)**ω** = (kara)**ω** = (mai =du)**ω** … 佐良浜男からも…

そして，[A 型]の (ju[**na**] guni)ω+ (bikiduN)ω = ([**kara**])ω * = (mai du)ω …では，本来(mai=du)ω の部分に出現するはずの H 音調の山が、左方向へのシフトによって(kara)ω の部分に移動し，B 型の韻律型と中和した（と発表者は解釈している）。この左シフトは，助詞（or 助詞連続）にしか生起しないようだ。

3. 2. 型の中和と韻律語の recursivity

前節では，上地・与那覇方言のプロミネンスの実現には，3 モーラが 1 単位となるフットが関与していることを見てきた。それではもし韻律語の大きさが 3 モーラに満たない場合には，どのような韻律型が出現するのだろうか。その場合には韻律型の中和が生じる。次の上地方言の例がそれを示している。

（12）宮古島上地方言の韻律型の中和現象 （kara：奪格，du：焦点）

[A 型] **[kaa** =**kara**=**du** … 井戸から… **[futsɨ** =**kara**=**du** … 口から…

[BC 型] **[jaa** =**ka]** ra=du… 家から… **[jama** =**ka]** ra=du… 山から…

[funi =**ka]** ra=du… 舟から… **[nabi** =**ka]** ra=du… 鍋から…

他の多くの三型体系と同様，上地方言の C 型は 1 つ目の韻律語内にプロミネンスを実現させる。しかし（12）の条件下では，最初の韻律語を形成する C 型の名詞「舟」や「鍋」は 2 モーラ語であるため，そこには 3 モーラのフットを形成できない。その場合は次のように韻律語を再構築し，より上位のレベルで 3 モーラのフットを実現させる。なおそのフットは，（8）に示したように，韻律語の右端と揃える。

（13）上地方言の韻律構造の組み換え

[C 型] （ na bi ）ω* = （ ka ra du）ω → （ na bi = **ka ra du** ） **ω** （鍋から）

μ μ **μ μ** ＜ **μ μ μ** ＞F

3 モーラフット構築には小さすぎる 韻律構造の組み換え

その結果 C 型は B 型の韻律型と同じ型となってしまい，そのために（12）のような型の中和が起こる。

上地や与那覇など 3 モーラフットを持つ体系では，特定の条件下で型の中和が生じるが，その原因には，このようなフットと韻律語の間のサイズのミスマッチがあるのではないかと思われる。従来から宮古諸島の多くの方言は二型体系である（or 一型アクセント化の途上にある）と記述されてきた（例：平山（編著）1983，平山ほか 1967）が，その背景にも，このような中和現象が関与していた可能性もある。

（13）と同じような韻律構造の組み換えは，（7）で見た与那覇方言の B 型の韻律型にも関わっている。

（14）与那覇方言の韻律構造の組み換え

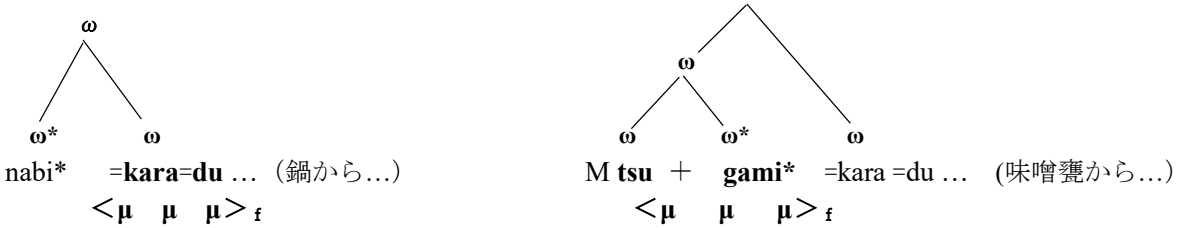
[B 型]（N tsu）$_{\omega}$+ （ga mi ）$_{\omega}$*=（kara=du）$_{\omega}$ → （N tsu ga mi ）$_{\omega}$ =（kara=du）$_{\omega}$ …（味噌甕から）

μ μ　　**μ ＜ μ μ μ ＞$_F$**

3 モーラフット構築には小さすぎる　**韻律構造の組み換え**

以上のような韻律構造の組み換えのためには，次のような recursive な（ある韻律範疇がそれと同じ韻律範疇の内部に埋め込まれているような）構造体を，韻律語に想定する必要があるだろう。

（15）韻律語の recursive な階層構造



Ito 2010 は，（1）に示した韻律階層の中の「韻律語」より上のレベル（韻律語，韻律句，イントネーション句）の韻律範疇には，recursive な構造体が仮定できるとした。韻律語がプロミネンス位置の算出に欠かせない宮古諸島の言語体系は，その仮説の妥当性の検証のためにも重要なデータを提供できるだろう。

４．八重山諸島の韻律体系　— obligatoriness の制約に関わる方言間の違い

以上，宮古島の上地・与那覇方言には 3 モーラから成るフットが想定され，特定の韻律語が 3 モーラに満たない場合には，そこに韻律構造の組み換えが生じることを見てきた。しかしそのような組み換えはすべての体系に生じるとは限らない。次の黒島方言の三型体系にも 3 モーラから成るフットが想定されるが, 最初の韻律語が 2 モーラの場合, C 型は低く平板な韻律型となり, そこに H 音調は出現しない。

（16）黒島方言の三型体系　　（kiNna：比格＋主題，hara~hera：奪格，du：焦点）

[A 型]　a[**bu** =**kiNna**… 洞窟よりは…　ma[**ki** =**kiNna**… 牧場よりは…　mu[**ru** =**kiNna**… 丘・森よりは…
[B 型]　[**taa** =**kiN**] na…田よりは…　[**aN** =**kiN**] na… 網よりは…　[**jama** =**kiN**] na… 山よりは…
[C 型]　funi =kiNna… 舟よりは…　nabi =kiNna… 鍋よりは…　uɕi =kiNna… 臼よりは…

[A 型]　[**haa** =**hara**=**du**… 井戸から…　pa[**na** =**hara**=**du**… 鼻から…　ma [**ki** =**hara**=**du**… 牧場から…
[B 型]　[**jaa** =**hara**] =du… 家から…　ja[**ma** =**hara**] =du… 山から…　ba [**ta** =**hara**] =du… 腹から…
[C 型]　fune = hera=du… 舟から…　nabe =hara=du… 鍋から…　uɕi =hera=du… 臼から…

同じ C 型の 3 モーラ名詞には [**pata**]ki =kiNna（畑よりは），[**saba**]ni =kiNna（サバニ舟よりは），[**pata**]ke =heradu（畑から），[**mina**]ha =haradu（庭から）のようにその名詞内部にピッチ下降が出現する。（つまり最初の韻律語が 3 モーラの場合には H 音調は実現する。）しかし黒島方言では，韻律語が 2 モーラの場合は（たとえ obligatoriness の制約に違反したとしても）プロミネンスを無理に実現させることはしない。

５．　まとめ

南琉球では，「韻律語」という単位を想定しながら調査を行うことで，今後も 3 種の型の区別を持つ韻律体系の発見が，相次いで成されていくに違いない。しかし三型体系を発見することが我々の最終目的なのではない（それはむしろ研究の出発点である）。次に取り組むべき中心的課題は，個々の韻律体系の共時的仕組みの解明と，この地域の韻律体系にこれだけの多様性が生じたことの原因の追究である。

たとえば本発表で試みたように，なぜ特定の条件のもとに型の中和が生じるのか，韻律語に recursive

な内部構造は想定されるのか，韻律体系に想定される一般制約（obligatoriness，culminativity，non-finality など）に各体系がどのように対処しているのか，等の考察が求められている。これらの考察を通じて琉球語プロソディーの記述研究は，今後も，日琉諸語の韻律研究のみならず，プロソディーの一般理論の発展をも牽引していくような，興味深いデータやあらたな視点を提供し続けていくだろう。

＊本発表は JSPS 科研費 18K00588, 19H00530, 20H01259，および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部である。

参照文献　（紙幅節約のため，論文の副題，掲載ページ等は省略。また発表については直近 3 年間のもののみ挙げる。）

青井隼人 2016「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント」『音声研究』20(3)； **青井隼人 2017**「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』13； **青井隼人 2018**「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇」『国立国語研究所論集』14； **青井隼人 2019**「南琉球宮古多良間方言の欠性的低音調」『音韻研究』22； **青井隼人 2022**「南琉球宮古語多良間方言における 3 種の音調型実現ドメイン」リンディフォーラム：ウェビナーシリーズ（20）（3 月 22 日）； **麻生玲子・小川晋史 2016**「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」『言語研究』150； **平山輝男（編著）1983**『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社； **平山輝男・大島一郎・中本正智 1967**『琉球先島方言の総合的研究』桜楓社； **五十嵐陽介 2015**「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』広島大学大学院文学研究科総合人間学講座； **五十嵐陽介 2016a**「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150； **五十嵐陽介 2016b**「名詞の意味が関わるアクセントの合流」『音声研究』20(3)； **五十嵐陽介ほか 2012**「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1)； **Igarashi, Yosuke et al. 2018** Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. Kubozono, H. and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization.* Walter de Gruyter Mouton；**Ito, Junko 2010** Parsing constraints and the prosodic hierarchy: recursion-based subcategories. 国立国語研究所コロキウム発表資料(2 月 22 日)； **Ito, Junko & Armin Mester 2013** Prosodic subcategories in Japanese. *Lingua* 124； **松森晶子 2010**「多良間島の３型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 監修『日本語研究の 12 章』明治書院； **松森晶子 2013**「宮古島における３型アクセント体系の発見」『国立国語研究所論集』6； **松森晶子 2014**「多良間島のアクセント規則を再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63； **松森晶子 2015**「南琉球の三型アクセント体系」『日本女子大学紀要 文学部』64； **松森晶子 2016**「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み」『言語研究』150； **松森晶子 2022a**「琉球祖語の韻律体系について」窪薗晴夫・守本真帆（編）『プロソディー研究の新展開』開拓社； **松森晶子 2022b**「宮古諸島における『韻律領域の拡張』と多良間島のプロソディー」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」共同研究会（5 月 28 日）； **松森晶子（印刷中）**「宮古語多良間方言の修飾構造体のプロソディー」五十嵐陽介ほか（編）『日琉諸語の記述・保存研究 II』国立国語研究所； **Matsumori, Akiko 2019** A Prosodic Unit, Recursive Structure and Nature of Accent of Miyako Ryukyuan. *The Linguistic Review* 29 (1) Mouton； **中川奈津子・セリック，ケナン 2020**「南琉球八重山語白保方言の語彙リスト」『琉球の方言』44 法政大学沖縄文化研究所； **新田哲夫 2022**「南琉球池間方言アクセントの動的音韻解釈」音韻論フェスタ 2022 発表（3 月 7 日）； **新田哲夫 2023a**「南琉球多良間方言アクセントの弁別特徴」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』15； **新田哲夫 2023b**「南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴」日本方言研究会第 116 回研究発表会発表（5 月 19 日）； **セリック，ケナン 2020a**「南琉球宮古語史」未公刊博士論文 京都大学；**セリック，ケナン 2020b**「南琉球宮古語水納島方言のアクセント体系と基礎語彙」『琉球の方言』44 法政大学沖縄文化研究所；**セリック，ケナン 2021a**「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』13； **セリック，ケナン 2021b**「南琉球宮古多良間方言は四型であって，三型ではない」国立国語研究所第 217 回 NINJAL サロン発表 (1 月 21 日) ； **セリック，ケナン 2021c**「多良間方言の韻律構造: 韻律語の再定義の試み」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共同研究会発表（3 月 14 日）； **セリック，ケナン・青井隼人 2021a**「宮古語多良間方言におけるアクセント単位の定義に関する試論」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究会発表（12 月 18 日）； **セリック，ケナン・青井隼人 2021b**「多良間方言の韻律構造の解明に向けて」『国立国語研究所論集』21； **セリック，ケナン・青井隼人 2022**「南琉球宮古語多良間方言における『名詞＋動詞』構造の複合名詞アクセント」窪薗晴夫・守本真帆（編）『プロソディー研究の新展開』開拓社； **セリック，ケナン・麻生玲子 2023**「八重山語小浜方言の 3 型のアクセント体系について」国立国語研究所令和 5 年度第 1 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会（6 月 10 日）； **セリック，ケナン・麻生玲子・中澤光平 2022**「南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料」『国立国語研究所論集』22； **セリック，ケナン・麻生玲子・中澤光平 2023**「八重山祖語の系列再建に向けた小浜方言の AB/C の所属資料」『アジア・アフリカ言語文化研究』106